P－10.

Multicentric Castleman's Disease (MCD)の一例

(内科学第三)○原田芳巳，山本浩文，武市美鈴，藤本博昭，野本さい子，蜂巣　将，近藤美知，岡田　潔，代田常道，林　　徹

【症例】54歳，男性.

【主訴】全身倦怠感.

【既往歴】特記すべきことなし.

【家族歴】特記すべきことなし.

【現病歴】1996年2月初旬より全身倦怠感出現．近医にて高γグロブリン血症を指摘され，精査加療目的で3月6日当科紹介入院となった.

【入院時現症】呼吸音は清で肝脾腫を触知せず．両頚部，両腋窩，両鼠径に最大8mmのリンパ節を触知した．皮膚所見，神経学的所見に特記すべきことなし.

【検査所見】WBC 11,100/μl (neutro. 64%), RBC 3.90x10^6/μl, Hb 11.9g/dl, Plt 284x10^3/μl, ESR 131mm/hr, TP 10.1mg/dl (γ-glb 57.8%), IgG 6,820mg/dl (polyclonal), 血清interleukin-6 (IL-6) 10.0 (正常<4.0) pg/ml．画像上，両肺野の網状影と縦隔リンパ節腫脹を認める．TBLBにて肺胞壁の線維性肥厚を認める.

【入院後経過】貧血の進行とγグロブリンの増加（4月5日 IgG 8,510mg/dl）がみられた．右腋窩リンパ節生検施行し，"idiopathic plasmacytic lymphadenopathy"の所見を得，4月15日よりprednisolone 40mg/day開始．24日よりdouble filtration plasma phresis (DFPP)にて高分子物質除去を併用し，4月30日現在リンパ節の縮小とγグロブリンの低下（IgG 1,770mg/dl）を認めている.

【考察】Castleman病は慢性刺激に伴う反応性のリンパ節腫脹を主徴とする疾患で，特に多発性リンパ節腫大を伴いリンパ組織の形質細胞増生の強い型がＭＣＤと呼ばれる．近年IL-6とその病態とのかかわりが報告されている.

P－11.

アトピー性皮膚炎に対する眼科臨床分類の試み

（眼科）○八木橋朋之、真田彰郎、若林美宏、岩崎琢也、臼井正彦

［目的］ アトピー性皮膚炎における眼病態を把握するために眼合併症を組み合わせた臨床分類が必要である．今回，我々が考案した眼科臨床分類によりアトピー性皮膚炎の眼合併症を検討した.

［対象および方法］ 1991年10月から1995年6月までの3年8ヶ月に東京医大眼科を受診したアトピー性皮膚炎436例872眼（男性223例，女性213例，年齢3～62歳，平均22.6歳）である.

<u>アトピー性皮膚炎眼科臨床分類（岩崎）</u>

0期：皮膚炎は四肢・体幹限局型で眼科的合併症なし

1期：皮膚炎は顔面型（＋四肢・体幹型）眼瞼炎や点状表層角膜症などの前眼部限局型

1v期：1期＋周辺部硝子体異常

2期：1期＋毛様体･網膜の裂孔・部分剥離単独例

3期：1期＋白内障単独例

3v期：3期＋周辺部硝子体異常

4期：1期＋白内障＋毛様体･網膜の裂孔・部分剥離単独例

5期：1期＋白内障＋毛様体･網膜剥離重症例（水晶体の偏位・亜脱臼，眼内炎，広範な網膜・毛様体剥離，巨大裂孔，PVR）

［結果および結論］ 眼科受診した症例はすべて顔面に皮膚炎があった．白内障は合計285眼32.7%に,裂孔・剥離は合計103眼11.8%にみられた．1期469眼53.8%，1v期85眼9.7%と合計535眼61.4%が前眼部型であった．裂孔剥離単独例の2期は33眼3.8%であった．白内障合併例のうち，単独例は3期150眼17.2%，3v期65眼7.5%，215眼24.7%であった．また，白内障＋裂孔・剥離合併例は4期62眼7.1%，5期8眼0.9%，合計70眼8.0%であった.